

英語の歌に対する学習者の意識と Din の発生 —楽しい歌か、役に立つ歌か—

今西 竜也*

Learners' Awareness of Effectiveness of English Songs and Occurrence of Din:
Fun or Effective Songs

Tatsuya IMANISHI*

Accepted November 4, 2020

抄録: 英語学習において、英語の歌を聞いたり歌ったりすることが学習者の技能を向上させることは多くはないものの研究されてきた。しかしながら、学習者においては、どのように英語の歌の効能を意識しているのだろうか。また、英語学習における英語の歌の機能として、無意識に行われるメンタルリハーサルである Din が一部の役割を担っている。この Din が学習者においてどれほどの割合で経験されているのか、また Din の発生が、英語学習者による英語の歌の意識とどのような相関が見られるのか明らかにする。

索引語: 英語の歌の価値づけ、無意識なメンタルリハーサル、中学校英語授業

Abstract: Listening to and singing English songs has been studied as an efficient method for improving English language learners' skills. But how does such language learning through listening to and singing English songs occur? Din, unconscious mental rehearsal, is used during English language learning through songs. Then, how many English language learners have experienced Din and how is its occurrence related to language learners' awareness?

Key Words: evaluation of English songs, Din, English classes at junior high school

* 京都教育大学附属京都小中学校

1. はじめに

学校の英語の授業で、英語の歌を聞いたり歌ったりしたことのある人は多いだろう。現在 6 社ある中学校の検定教科書を見てみると、すべての教科書において英語の歌が掲載されており、英語の歌が、英語学習において、何かしらの効果があることは見て取ることができる。英語の歌がどのような効果があるのかは、様々な研究がなされているが、Murphey (1990) では無意識なメンタルリハーサル、すなわち Din もまた、英語の学習において効果的であり、Din の発生には英語の歌が最も効果的であると述べている。メンタルリハーサルとは、意識的または無意識的に、学習者が学んだこと、聞いたこと、読んだこと、将来発話もしくは書くであろうことを脳内で練習することであると Guerrero (1994) によって定義されている。さらに Murphey (1990) はメンタルリハーサルを、意識的なものと無意識的なものに分類し、後者について Din と定義した。Imanishi (2007) においては、メンタルリハーサルおよび Din は日本人学習者が英語を学習する際においても発生し、それらを誘発するインプットは英語の歌が最も影響力を持っており、それは理解可能なものでなくても有効であることが述べられている。

(1) 教書における英語の歌

英語の教科書には英語の歌が掲載されている。Aihara (2006) では、中学校の検定教科書、*New Horizon English Course*, *Sunshine English Course*, *New Crown English Course* を取り上げ、その 1 年から 3 年のすべての教科書に英語の歌が掲載されていることを示したほか、授業において英語の歌は、主に 4 つの使われ方がされており、それらは、授業の最初にウォームアップとして、リスニングの練習として、学習における雰囲気の変化や転換として、異文化理解の目的としてである。また、今西 (2018) では、当時の中学校の検定教科書 6 社分において、3 学年 18 冊においてすべて複数の英語の歌が掲載されており、中には英語の歌について紹介や解説された文章が学習単位として設定されているものもあることを示している。早田 (1994) では英語と学習者には、親近性の高いメディアと低いメディアがあり、親近性の高いメディアは学習転移性が高いと述べているように、親近性の高低によって学習転移性に違いがあることを示している。教科書の単元で学習した言語材料は、学習者にとっては本物の英語というよりは、人工的に作られた英語学習のための英語であるように感じられる一方、詩や歌、偉人のスピーチなどはオーセンティックな題材であると言えるだろう。学習者にとって学習した内容を、実際の使用の中で見つけることは、有用感を得られる瞬間である。また、長谷川・小池 (1985) は、元来ことばには、楽しいものが含まれており、日本語に限っても、落語、漫才、芝居、演歌など、娯楽的なものはすべてことばが関係しており、英語においても、早口言葉、リズム遊び、なぞなぞ、ジョークなど、楽しみながら英語を学べる教材があることに言及している。近江 (1996) においては、ことばを「インクの染み」ではないと強調している。意味のないことばなどなく、書き手、話し手の思いがそこにあるのである。それから学ぶことを可能にするために、オーセンティックな題材に出会うことは英語学習者にとって十分意義深いと考える。

(2) メンタルリハーサルと Din

英語の歌の、英語学習における効果を論じる上で重要となるものとして、メンタルリハーサルと Din があげられる。Guerrero (1994) によると、学習者はメンタルリハーサルによって、単に頭の中

で思い出し、繰り返し、もしくは真似をするほか、さらにもっと創造的に、将来の会話や発話を想定し、その英語が正しいかどうか確かめることもあると述べている。Murphey (1990) では無意識に繰り返されるメンタルリハーサル、すなわち Din が、被験者の 74% によって経験されていることを示している。Krashen (1983) は、無意識のメンタルリハーサルは理解可能なインプットによって発生し、学習者がまだ習得していないが、習得する準備ができている $i + 1$ であることが必要であると主張した。しかし Murphey (1990) は、耳にした歌が、内容の理解の度合いに関わらず無意識に脳内で繰り返される、song-stuck-in-my-head (SSIMH) 仮説を主張することにより、Krashen (1983) を否定し、音楽の歌詞など、意味を理解していないものでも Din は起こると主張した。なお、Parr and Krashen (1986) は、学習者の習熟度とメンタルリハーサルが起こる頻度の関係性は低く、理解可能なインプットは、文法やドリルなどのタスクより効果的であるとした。そして 50 分の授業時間は学習者にメンタルリハーサルを起こさせるのに十分な時間であるとした。

(3) 英語の歌の効果

英語の歌が学習において使われるのかという点においては少なくともはないが、日本人の英語学習者にとって、英語の歌がどのような効果を持つのかという点においては、多く研究がなされていない。

Murphey (1989) では、歌の主な材料は I, you, love であり、I と you は明確に述べられていないことが多く、歌の中の登場人物が誰であるのかを特定することはできない。そのため、I や you を自分の都合の良い人物を想定して語を入れ替える、代数公式のような捉え方ができて、学習者の英語表現に役立つと示している。また、場所や時間の特定がないことも、自分のことに置き換えることができる要素であるとしている。また、歌は通常の発話の約 2 分の 1 の速さであり、単にゆっくりではなく、単語やフレーズごとの区切りが長いという特徴があるため、学習者にとって聞き取りやすいスピードであることも示している。さらに、歌詞の読み物としての構造が、アメリカの小学 4 年生並みであることから、内容を楽しむという点においてもメリットがあるだけでなく、歌を聞くことはたいてい一方向のコミュニケーションであることから、理解できないかもしれないという不安や恥ずかしさを感じることがない点もよいと述べている。

Imanishi (2007) では、メンタルリハーサルの学習者に対する効果について、記憶作用へ役割が大きいとしている。学習者は語彙を増やし、単語の発音やイディオムを覚えることができるとされる。しかしながらメンタルリハーサルを通して文法材料を記憶することや、発音を上達させることはない。また、情報をすばやく呼び起こす能力にも役立ち、メンタルリハーサルがワーキングメモリーと長期記憶の間で働いていることから、ワーキングメモリーと長期記憶の間に痕跡を残していると述べている。英語の四技能では、発話能力がもっともメンタルリハーサルの影響を受けるとしている。さらに Din が発生することにより、英語の授業の中だけでなく、様々な場所や時間に英語に触れることができることから、無意識のメンタルリハーサル、すなわち Din を発生させることは、英語学習者にとって効果があることを示唆している。

(4) 英語の歌に対する学習者の意識と Din

英語の歌は無限と言っても過言でないほど存在するが、どのような歌が効果を持っているのだろうか。Imanishi (2007) では、リズム、メロディー、歌詞の内容がよいとすることが、メンタルリハーサルの引き金となることが示されているが、これだけでは、非常に多くのものが該当してしまい、学

習者に最適な英語の歌を選ぶのが難しい。歌詞の内容によって、喜びや悲しみ、絶望、希望など、様々な内容があるだけでなく、Hevner (1936) はそれぞれの曲の音楽的特徴がどのような感情に影響しているのかを示している。ましてや Murphey (1989) は英語の主材料は、I, you, love であって、人物や場所、時間が特定されておらず、聞く人によってとらえ方が変わるということを示している。よって、内容が良いという基準は聞く人によって異なり同一でなく、リズムやメロディーについても聞く人だけでなく、聞くタイミングや心境によってとらえ方が変わるであろう。一般に提供されている趣味や娯楽としての音楽のほかにも、英語の歌は存在する。長谷川・小池 (1985) が英語の歌を用いた英語文型の指導について研究した際、情報理解度のテストに、英語を母国語としない学習者のために、よく知られたメロディーを使って、英語の基本表現を教えられる歌を活用した。これはハーバード大学の研究者が行った Audio-Singual Method の研究に戻って作られたものであるが、一般に提供されている表現活動である、趣味・娯楽の音楽に対して、英語学習のために作られた人工的な歌であるにとらえることができるだろう。このように英語の歌を分類するには、そのものの特徴や生まれた経緯など、無数の分類方法が存在し、一概にとらえることは難しい。そうであるならば、どのような英語の歌が、学習者の学習や Din の発生に効果的であるのかということについて、英語の歌の特徴ではなく、学習者がその歌をどのように捉えるかによって検証することはできないであろうか。

2. 本研究

(1) 目的

先行研究における英語の歌や Din の取り扱いに関して、どのように授業に取り入れるかや、それによる学習者の習熟度の変化についての研究はなされてきたが、これらは指導者目線の研究であり、学習者がどのようにとらえているのかという、学習者目線での研究はなされてこなかった。学習者が、英語学習において英語の歌をどのようにとらえているのか、それから得られる効果や価値と Din の発生についての調査と相関を明らかにするとともに、それら習熟度によって差があるのかを示す。

(2) 被験者

京都教育大学附属京都小中学校 8 年生 (中学 2 年相当) 79 名を被験者とした。被験者は学年開始時の 4 月から帯活動として、英語の歌を歌う活動をしてきた。週 4 単位の中ではほぼ毎時間、授業の始まりに 10 分程度、2 曲から 3 曲の英語の歌を、指導者のギター伴奏とともに歌った。1 年間で歌った英語の歌は、When I'm Gone (Anna Kendrick), Take Me Home, Country Road (John Denver), Leaving On A Jet Plane (John Denver), Let It Be (The Beatles), Hey Jude (The Beatles), I Don't Want To Miss A Thing (Aerosmith), We Will Rock You (QUEEN), Stand By Me (Ben E. King) である。なお学年後半の 12 月には TOEFL Primary Step 2 を受験し、CEFR の A2 相当が 54 名、A1 相当が 25 名であった。

(3) 題材

被験者は学年末の 3 月にアンケートに回答した。アンケート項目は 9 項目であり、「よくあてはまる」「どちらかといえば当てはまる」「あまり当てはまらない」「まったく当てはまらない」の 4 段階で回答した。項目は表 1 に示す。

表 1 アンケートの質問項目

1	英語の歌を聞いたり歌ったりすることによって、文法を学ぶことができる。
2	英語の歌を聞いたり歌ったりすることによって、発音を学ぶことができる。
3	英語の歌を聞いたり歌ったりすることによって、イントネーションを学ぶことができる。
4	英語の歌を聞いたり歌ったりすることによって、単語の意味を学ぶことができる。
5	英語の歌を聞いたり歌ったりすることによって、英語を学習する気分になる。
6	英語の歌の歌詞の内容を楽しむことがある。
7	英語の歌を聞いたり歌ったりすることは、英語の学習に役に立つと感ずることがある。
8	英語の歌を聞いたり歌ったりすることは、楽しい。
9	授業で聞いたり歌ったりした歌で Din が発生することがある。

3. 結果

(1) 分析方法

アンケートの項目で回答された 4 段階について、Guerrero (1994) と同じ検定方法で分析した。4 段階の「よくあてはまる」「どちらかといえば当てはまる」「あまり当てはまらない」「まったく当てはまらない」を肯定の回答と否定の回答の 2 分類に置き換え、パーセンテージの提示と、カイ二乗検定を行った。なお、優位水準は 5% で行った。さらに、Din の発生と学習者の意識の相関を見るために、スピアマンの順位相関係数を提示する。

(2) データの分析

アンケートの結果を表 2 に示す。被験者 79 名の結果をパーセンテージで A2+A1 に示し、さらに A2, A1 の結果を示した。カイ二乗値を含めすべて小数点 2 位までを示している。

項目 1 から 4 においては、学習者が英語の歌を歌うことによって、どのような効果があるかとらえているかを問うた項目である。文法、発音、イントネーション、単語の意味を学習するにあたり、かなりの高い割合で、英語の歌からそれぞれを学ぶことができるとらえている。上位群である CEFR の A2 の被験者と、下位の A1 の被験者を比べると、文法の学習と単語の意味の学習においては 10% 以上の差があるが、カイ二乗検定を行った結果、1 から 4 のどの項目においても有意な差はみられなかった。英語の歌を聞いたり歌ったりすることによって、英語を学習する気分になると回答した割合は全体においても、上位群下位群においても約 80% となっている。また、両群に有意な差は見られない。項目 6 および 7 では、学習者の英語の歌そのものに対する価値づけがどのようになされているのかを示している。英語の歌の歌詞の内容を楽しんでいる学習者は全体で 80% を超えている。上位群では 85% を超えており、下位群では 72% にとどまっているが、カイ二乗検定の結果、両群に有意な差は見られていない。対して、英語の歌を聞いたり歌ったりすることが、英語学習において役に立つと感じている学習者は、全体では 57% 程度である。上記の発音や単語の意味を学ぶことができるとは感じているが、英語の学習に役立つという感覚は薄いようである。内容や学習効果に関わらず、単に英語の歌を聞いたり歌ったりすることが楽しいと答えている学習者は 90% を超え、上位群

下位群の有意な差も見られなかった。英語の歌で Din が発生するかを質問した項目では、全体で 67% の学習者が、英語の歌で Din を経験している。上位群の方が少し多くはあるが、下位群との有意差は見られていない。

表 2 アンケートの結果とカイニ乗値

Item	Focus or Purpose	A2+A1		A2		A1		A2-A1
		No %	Yes %	No %	Yes %	No %	Yes %	$\frac{2}{X}$
1	文法を学ぶことができる	31.65	68.35	27.78	72.22	40.00	60.00	1.18
2	発音を学ぶことができる	6.33	93.67	3.70	96.30	12.00	88.00	1.98
3	イントネーションを学ぶことができる	26.58	73.42	25.93	74.07	28.00	72.00	0.04
4	単語の意味を学ぶことができる	16.46	83.54	12.96	87.04	24.00	76.00	1.51
5	英語を学習する気分になる	20.25	79.75	20.37	79.63	20.00	80.00	0.00
6	歌詞の内容を楽しむことがある	18.99	81.01	14.81	85.19	28.00	72.00	1.93
7	歌は英語学習の役に立つ	43.04	56.96	42.59	57.41	44.00	56.00	0.01
8	歌を聞いたり歌ったりすることは楽しい	8.86	91.14	7.41	92.59	12.00	88.00	0.45
9	英語の歌で Din が発生することがある	32.91	67.09	31.48	68.52	36.00	64.00	0.16

Total sample = 79. A2 sample=54. A1 sample=25.
No/Yes based on the two category distribution, df = 1.

Din の発生と学習者の意識の相関に関して、スピアマンの順位相関係数を表 3 に示す。全体において、英語の歌で Din が発生することと、英語の歌から発音を学べる、またはイントネーションと学べるという回答に対して相関があると示されている。しかし発音が学べるに関しては、上位の A2 においては Din の発生との相関において、優位性は示されていない。そのほか、文法を学べると感じている学習者と単語の意味を学べると感じている学習者と、Din の発生との相関は見られないが、情意面において、英語の歌を歌ったり聞いたりすると英語を学習する気分になると感じている学習者と Din の発生には 1% 水準で相関が見られており、これは A2 群では見られないという特徴がある。

歌を聞いたり歌ったりして、歌の内容を楽しむことがあると答えた学習者と、Din の発生には相関関係があり、A1 群において、より有意差が見られる。一方、英語の歌を聞いたり歌ったりすることが、英語学習の役に立つと感じている学習者と Din の発生とは相関関係が見られない。歌を聞いたり歌ったりすることは楽しいと感じている学習者と、Din の発生とは相関関係があり、1% 水準で優位差が示されている。

表 3 参加者全体及び CEFR 別の Din の発生と各項目の順位相関数

	1 文法を 学ぶことが できる	2 発音を 学ぶことが できる	3 イントネー ションを 学ぶことが できる	4 単語の 意味を 学ぶことが できる	5 英語を 学習する 気分になる	6 内容を 楽しむことが ある	7 歌は 英語学習の 役に立つ	8 歌を歌う ことは 楽しい
全体 (N=79)	-.12	.20 ⁺	.37 ^{**}	.11	.36 ^{**}	.46 ^{**}	.18	.57 ^{**}
A2 (N=54)	.09	.15	.50 [*]	.02	.23	.47 [*]	.10	.54 ^{**}
A1 (N=25)	-.25 ⁺	.23 ⁺	.31 [*]	.16	.42 ^{**}	.46 ^{**}	.21	.57 ^{**}

^{**} $p < .01$, ^{*} $p < .05$, ⁺ $p < .10$

4. 考察

(1) 学習者の英語の歌に対する意識

英語の歌から文法や発音、イントネーション、単語の意味を学習できるととらえている学習者は非常に多いが、英語の勉強に役に立つととらえている学習者は少ない。筆者は英語の文法、発音、イントネーション、語彙力が、英語の評価における主な要素であるにとらえていたが、学習者の経験からは、それらの要素が英語の学習に役立つものと感じていないケースが多いかもしれない。指導者と学習者の英語の学習の要素についての乖離を小さくする必要性はあるものの、英語の歌を聞いたり歌ったりすることによって、学習者が、文法、発音、イントネーション、単語の意味を学ぶことができると認識していることは示されたと思われる。

英語の歌を聞いたり歌ったりすることによって、英語を学習する気分になるという回答を見れば、上位下位に関わらず、高い割合を示していることから、英語の歌は英語が得意な学習者でも、苦手な学習者にも情意・意欲面において効果があると述べることができるだろう。

英語の歌を聞いたり歌ったりすることに対して、上位下位に関わらず、楽しいと感じている学習者は多い。内容を理解することが楽しいという割合も同様に高いことから、歌の楽しさは内容の興味深さにも影響されていると思われる。しかし、英語の歌は学習の役に立つという点においては、低い割合を示していることから、英語の歌が役に立つと実感させることが重要な課題であると考えられる。

Din の発生に関しては、上位下位に関わらず、およそ 3 分の 2 の学習者が英語の歌での Din を経験している。よって学習の状況に関わらず、Din の発生を期待することができると見て取れるだろう。

(2) Din の発生と学習者による英語の歌の価値づけ

Din の発生と、学習者による英語の歌の意識の相関関係を見てみると、いくつかの項目について相関関係が見られた。英語の歌によって学習する気分になると感じている学習者と、Din の発生の相関関係を見てみると、全体でも下位でも相関関係が見られるにも関わらず、上位においては見られない。よって、下位の学習者に対して、英語の歌による学習意欲高まりを期待するのであれば、Din を発生させることが一つの効果的な方法であり、また下位の学習者が学習意欲の高まりを持つことで、全体の学習意欲の高まりも期待し得ると言える。

特に強調したいのは、学習者による英語の歌の価値づけと、Din の発生である。英語の歌の価値づけを、英語の歌は楽しい、英語の歌の歌詞の内容が楽しい、英語の歌は役に立つという 3 つの価値を見るのであれば、Din の発生に相関関係があるのは、英語の歌を楽しいと、英語の歌の歌詞の内容が楽しいであり、それぞれ 1% 水準で相関関係が見られている。このことから、英語学習において、英語の歌は役に立つという価値をもって、学習者に英語の歌を提供するよりも、英語の歌を楽しもう、英語の歌の歌詞を知ってみようという姿勢で提供することの方が、Din の発生を誘発するにより効果的である。

参考文献

今西竜也 (2018) 「英語授業における歌の活用」 英語授業研究学会関西支部第 263 回例会発表資料

- 近江誠 (1996) 『英語コミュニケーションの理論と実際』 東京：研究社出版
- 早田武四郎 (1994) 「大学英語教育における英語の歌の効用」『和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要』 3 号 pp.109-112.
- 長谷川潔・小池直己 (1985) 「放送英語の教育的効果に関する研究 (IV)：英語の歌を用いた英語文型の指導」『日本教科教育学会誌,』 第 10 巻 3-4 号 pp.87-92
- Aihara, K. (2006). Improving English skills through songs. *Journal of Ibaraki Christian University, I, Humanities, 40*, 1-12.
- de Guerrero, M. C. M. (1994). Form and functions of inner speech in adult second language learning. In Lantolf, J. P. and G. Appel (eds.). *Vygotskian approaches to second language research*. pp.83-116. Norwood, N.J.: Ablex Publishing Company.
- Hevner, K. (1936). Experimental studies of the elements of expression in music. *The American Journal of Psychology, 48* (2), 246-268.
- Imanishi, T. (2007). The significance of mental rehearsal in English language teaching. Unpublished Graduation Thesis. Kyoto University of Education.
- Krashen, S. D. (1983). The Din in the head, input, and the language acquisition device. *Foreign Language Annals, 16* (1), 41-44.
- Murphey, T. (1989). Music and song in language learning: An analysis of pop song lyrics and the use of music and song in teaching English to speakers of other languages. Ph. D dissertation. Universite de Neuchateld.
- Murphey, T. (1990). The song stuck in my head phenomenon: A melodic Din in the LAD? *System, 18* (1), 53-64.
- Parr, P. C. and S. D. Krashen. (1986). Involuntary rehearsal of second languages in beginning and advanced performers. *System, 14* (3), 275-278.